

かつて一握りの人のみが鑑賞できた絵画

葡萄図（草津宿本陣蔵）



草津宿本陣は史跡に指定されており、建物そのものが貴重な文化財です。しかし、建具のうち「障壁画（しょうへきが）」といわれる襖（ふすま）絵や杉戸絵などは、それぞれに美術品としての価値を有しています。とりわけ、長く続く畳廊下を抜けた先の一段上がった空間「上段棟」には、そうした障壁画がいくつかありました。

そのうちのひとつが《葡萄（ぶどう）図》です。

《葡萄図》は、本陣の中で最も格式の高い部屋である「上段の間」に配されています。部屋の外側から見ると箆欄間（おさらんま）になっている箇所、内側では欄間の裏から左の壁にかけて3面に渡り《葡萄図》が広がります。草津宿本陣を見学する場合でも、上段の間を臨む際にちょうど頭上にあるため全体を見ることはできません。上段の間は、江戸時代にもその格式の高さから入室できる人が限られており、この絵を見ることができたのはほんの一握りの人だけだったと考えられます。

《葡萄図》には落款などがなく、制作年代・作者とも未詳です。絹本墨画で、木板に貼付けられています。絵絹には、描画面の裏側に金箔を押す「裏箔」がなされており、華やかながらも落ち着いた画面となっています。墨で描かれる葡萄の枝には小ぶりの実が豊かになり、枝葉は巧みな色使いによって空間的な奥行きが表現されます。

上段の間にはこのほかに、江戸時代の画家・松村景文の描いた《秋海棠（しゅうかいどう）図腰高障子》が、配されています。秋海棠は多年草の植物で、秋頃に開花します。ここに描かれる秋海棠も小さな淡紅色の花をつけており、上段の間のしつらえは《葡萄図》とあわせて秋をイメージしたものであったと考えられます。

（令和6年11月・草津宿本陣 川田 千紘）

（部分）

